



特集 2017年度正義と平和協議会全国会議

「社会の中で福音と生きる 信仰をわたしたちの生活に根付かせるために」

2月24日夕方から26日正午まで、東京のYMCAアジア青少年センター9階ホールを会場に、「社会の中で福音と生きる 信仰をわたしたちの生活に根付かせるために」というテーマで、2017年度正義と平和協議会全国会議を開催しました。

今回の会議は、従来とはかなり異なるスタイルを試みました。試みのポイントは、
1、従来の活動報告中心の会議をやめ、「改憲」「原発」「沖縄」という3つのテーマで8

つのグループに分かれ、お互いの考えをじっくり聴き、話し尽くすことに比重を置いたこと。

2、従来、初日に行ってきた公開講演会をやめ、会議出席者の出会いのプログラムの時間としたこと。

3、会議終了後、それぞれが自分の置かれている場所に戻り、正義と平和をより広がりのある活動にするため、それぞれが課題を持ち帰るものとしたこと。

これらのうち3つめの点は、会議のスタイルの変更の狙いとも言えるものです。正義と平和協議会は、いつもいつも、一部の熱心な人たちの集まりとして、小教区や修道会の中で浮いた存在だと言われ続けてきました。もちろんそこには、「預言的役割」という大切なミッションがありました。しかし今日、日本も世界も、一部の人の問題意識を占有しては手遅れになりそうな、一刻を争う、危機的な状況に陥っています。

いま、国内に目を向けるなら、安全保障関連法が施行され、自衛隊が武器使用を可能にして南スーダンに派遣され、改憲がもはや現実のものとなりました。沖縄では、民意を完全に無視して、新たな米軍施設の工事が強引に進められています。福島では、原発事故後、廃炉どころか、事故処理の方法さえ見つかっていないのに政府は再稼働政策へと舵を切り、事故の避難者に対する支援を、復興という名のもとに打ち切っていく方針です。

自己満足に陥っている時間はありません。私たちはひとりでも多くの人と、この問題を共有し、なんとかしていかなければならないのです。では、そのために、私たちは具体的に何をしな

ければならないのか。

初日の出会いのプログラムでは、勝谷会長がイニシアチブをとり、ゲームを通して、異なる意見の人と、納得し合える答えを見つけていくプロセスを体験しました。二日目午前中は、精神科医の香山リカさんをお呼びし、今日の危機的な状況のもと、わたしたち宗教者の役割は何か、精神医学の立場からお話いただきました。午後のグループでは香山リカさんのお話しを受け、これからわたしたちが具体的に何をしていかなければならないのかを、テーマごとに話し合いました。3日目の全体会では、グループでの話し合いの結果を発表しました。わたしたちは、恐れずに隣の人に話しかけ、運動を広げていかなければなりません。

今回のプログラムは、勝谷会長以下、正義と平和協議会委員11人と事務局とで、時間をかけ、幾度も話し合い、作っていきました。会議中の折々には、シスター山本きくよ（援助修道会）に歌を歌っていただきました。また、長く正義と平和の活動に力尽され、昨年帰天された、由井滋神父様（名古屋教区）、渡辺清さん（仙台教区）お二人のための祈りを捧げたことを、ここでお伝えします。

講演会報告 『改憲・沖縄・原発』

■ 香山リカ（精神科医・立教大学教授）

今の世の中、なんでこんなふうになってしまったのか、私は精神科医なので、精神科医からみると、こういうことで説明がつくかもしれないということについて、それは最終回答ではないですが、お話しいたします。

1 マインドフルネス療法と現代

今の精神医学はブレインサイエンスという、脳から考える科学がメインになっています。多くの精神疾患、心の病が脳の不調から起きることがわかり、その不調をとる治療を行います。

最近アメリカを中心として流行っているのが、マインドフルネス心理療法です。これは、初期仏教のヴィパッサナー瞑想という瞑想法をとり入れた心理療法で、心の中のことをあまり考えず、聞こえている音とか、周囲の変化とかをひたすら実況中継し、そのうち「私」が消えてしまうことを目指しています。心の奥に立ち入って、生きるとはなんぞや、なんて考えないのです。これが心理療法に使えるかもしれないと気づいた人がアメリカにいて、仏教の由来であることは隠して心理療法として、スタイルを整え

ました。そうしないとアメリカ社会では受け入れられないと考えたからです。仏教というと、70年代には、ドラッグとかカルトとか、ヒッピーとか、そういう怪しいイメージがあったからです。そしてアメリカで大当たりしました。しかし二つの問題がありました。一つは、これに目をつけた人たちのなかに、IT企業の人たちがいたということです。IT企業が社員の研修に取り入れたことで、マインドフルネスは一気にビジネスマンにひろがりました。今、ベストセラーになっている『最高の休息法』（久賀谷亮、2016.7、ダイヤモンド社）という本があります。これは、企業や政府で働く人たちがどうやって疲れも知らずに働いているかということが書かれています。ここで紹介されているのがマインドフルネスなのです。つまり、マインドフルネスで脳を休ませて、それで他の会社を蹴落として、ますます儲かるように、というトレーニングです。

一方、仏教としてヴィパッサナー瞑想をやっているテラワダ仏教協会では、必ずはじめに祈りを唱えます。そのなかに、慈悲の瞑想というのがあります。

それは、キリスト教のフランシスコの祈りに似ています。最初に、私が幸せになりますように、私の愛する人が幸せになりますように、と祈ります。次に、私が嫌いな人も幸せになりますように、そして、私のことを嫌っている人も幸せになりますように、最後は生きとし生けるものが幸せになりますように、と祈るのです。私が嫌いな人も幸せになりますように、私のことを嫌っている人も幸せになりますようにと祈る。本当に他者のために祈るのです。その精神と、うちの会社だけが儲かるようになって、全く相いれないものです。

もう一つの問題はもっと深刻です。最近、アメリカの海軍が戦地に行く前にマインドフルネスをやっているということがわかりました。攻撃したり殺したりするときでも心が動じない精神を作るためにマインドフルネスをやるのです。これは、宗教から生まれた瞑想が、最終的に戦



講演中の香山リカさん

争のために使われるという、まさに本末転倒、とんでもない話です。最初の目的が忘れられて、弱肉強食のために使われるとは、なんと皮肉なことかと思えます。

2 肥大化した自己愛

現代の遺伝子工学、生殖医療などでは、体外受精で赤ちゃんを授かる人がたくさんいます。いろいろな遺伝子上の問題があって赤ちゃんがお腹の中で育たない人のために、体外受精をした受精卵を選んでお腹に戻すのです。ところが、今はもっといろいろなことができるのです。男女産み分けなんて簡単です。お母さんが金髪、お父さんは赤い毛で、金髪の赤ちゃんが欲しければ、受精卵を調べ、金髪の受精卵をおなかに戻す。さらに進んで、受精卵の遺伝子を操作することが可能になり、アメリカではこれを解禁するかどうかが、いま、現実問題になっているのです。親は二人とも音痴だけど、音楽が得意な子がほしいな、じゃあやっちゃえ、となくなってしまった。

先ほどのマインドフルネスも同じです。最初は苦しんでいる人をリラックスさせて救う方法だったのに、もっと稼ぐマシンや、戦地で人を殺すマシンにするために使われるようになってしまった。

ここまではいいけど、これ以上はダメ、という線引きはむずかしいです。人間の欲は限りがないから、ここまでできるのなら、これもいいでしょうとって、はっと気がつくともんでも

ないことになってしまっていたという、まさにそういうことだと思います。

これには、自己愛という、私にはやりたいことをやる権利があるという、万能の思い込みが非常に関係しています。いまの時代には、あなたには可能性がある、夢は叶う、という自己愛を刺激するメッセージが溢れています。マインドフルネスも人にさらに夢を見せて、さらに可能性を甘受させるメッセージにすりかえられてしまいました。

自分を超えたもの、これは人間の立ち入るべきではないというような領域がなくなり、人間のやりたいことをすべてやってしまうことが問われているのが、今の社会なのです。原発なんて、自分でコントロールさえできないものを作ってしまったわけです。ギリシャ神話には、消えない火を盗んできて、オリンポスの神々が怒ったというプロメテウスの物語がありました。これがまさにこの問題です。

今から2000年以上前、ブッダは私のことが嫌いな人も幸せになりますよという心の姿勢を説きました。プラトンは、愛とか知とか理性とかを考えました。1000年2000年前の方が人間はずっと賢かったみたいです。その頃考えたことが、いま、全く活かされなくなってしまっているのです。人間が一生懸命大事にしてきた2000年の知的な営みが、まるでなかったかのようになくなってしまっているということは、一体どうということなのかと、最近よく思います。原発事故などは、人間の自己愛的な思い込みの典型です。不可知の、自分は立ち入ってはいけないという領域はもうないという傲慢な人間の暴走の結果です。

3 フロイトの心のメカニズムと現代

今から100年前にフロイトという精神分析医がいました。今は、精神科はブレインサイエンスの全盛期で、心にあまり深入りしないのがトレンドですが、その一方には、精神分析学という、心の奥のさらに奥まで分け入ろうという領

域もあるのです。これが今は劣勢で、劣勢であるということ自体問題だと思いますが、フロイトは、人間の不思議な心の動きの解説をしてくれました。そのひとつが否認、ディナイアルです。記憶から消してしまう。そういうことを人間はやらかすのです。それを受け止めたら自分の心が崩壊する。だからなかったことにしてしまう。私は、原発事故後、社会的にこれが起きていると思うのです。つまり、考え出したら正常ではいられないほど、本当は事態が深刻なのです。この間、原発事故跡にロボットを入れたら、あまりの放射線量で討ち死にみたいなことがありました。だけどそれを認められない。本来なら、原発事故はたいへんですが、知恵を出し合って、この局面を乗り切っていきましょう、というのが正直な態度だと思います。しかし、安倍総理大臣のように、アンダーコントロールと言ってしまおう。あそこまでぬけぬけと言ってしまうというのは、本人もそう思っているということです。自分自身をもだましていくわけです。これが否認のメカニズムです。でも、それほど事態は深刻だということです。自己愛的な尊大な思い込み、やっていい、できるという思い込みでやってしまっていて、否認をする、そういうメカニズムが起きているように思います。

フロイトは、心の防衛メカニズム、ディフェンスメカニズムについても説明しています。同一視。これは弱っている時、困っている時、自分以外の強いものに自分を合わせて、自分を安心させるというメカニズムです。



分科会の様子

たとえば、改憲の問題です。憲法を変えたいと言っている人たち、憲法があるために私たちは不遇な、不自由な思いをしているという気持ちの人が結構いるのです。憲法変えれば世の中バラ色だと。そんなことはありません。むしろ、人権や平和を奪って、私たちは窮地に追い込まれてしまいます。

そこに自己愛が関わっているのではないかと思います。やればできる。だけれども多くの人はそうやって焚きつけられて肥大した自己愛が満たされていないのです。やればできるはずなのになんでこんなに辛い目にあわなければならないのか。自己愛が満たされず、イライラしている。答えは簡単で、その肥大した自己愛が間違っているのです。所詮私たちなど、そんな万能ではないというのが究極の答えです。しかし、もう一つの答えは、あなたに才能と努力が足りないから、というものです。その事実をうけとめるのは辛い。それで人間はあの手この手でその現実を認めないようにする。それがフロイトのいう防衛メカニズムです。不安や失望を招く原因から目をそむけるテクニック。それが否認であったり、同一視であったりするのです。特に今の人たちは肥大した自己愛によってイライラとした葛藤が強いので、こういったメカニズムを多用しているのです。憲法を変えれば、私の自己愛は満たされると思うのです。

安倍総理には、この防衛メカニズム、自己愛が満たされない不本意さをすり替えて説明する才能があるのです。たとえば、3、4年前、朝日新聞が問題を起こしたことがありました。日本軍慰安婦の件で、ある人の証言が間違っていた。強制連行の話が事実ではなかった。そのとき朝日新聞は全面的にお詫びをしてしまった。そうしたら多くの人は、従軍慰安婦なんてなかったんだと受け取ってしまったのです。あの謝罪記事の翌日、安倍総理がたまたまニッポン放送のラジオ番組に出演して、朝日新聞の慰安婦の報道で多くの人が傷つき、日本の名誉が国際的に損なわれたと話しました。しかし朝日新聞の報道で、私やあなたの生活が傷ついたり



閉会式 派遣のミサ風景

なんか、しないです。だけれども、その時、多くの人が、私の生活がうまくいかないのも、私の人間関係がうまくいかないのも、朝日新聞のその証言記事のせいだったとすり替えてしまった。安倍さんは、あなたが悪いのではない、悪いのはこっちです、というのをうまく見つける天才なのです。この人を叩けばあなたは救われるということを提示するのです。私たちはそれに乗ってしまう。

東京で、今、恐ろしいことが起きています。ヘイトデモです。在日中国人、朝鮮人に対して、普通の人が、死ぬ、ゴキブリ、出て行け、レイプしろ、なんていうことを大きな声で叫ぶデモが、2013年頃から毎週のように行われています。人間の知恵はどこに行ったかという話です。

差別の問題は、被差別部落問題をはじめいろいろあり、長い長い闘いの歴史があります。それも、地道な人権同和教育などによって、20年くらいまえから、だいぶ良い状況に向かっていました。ところがここ数年、部落の人たちに対してもヘイトスピーチが行われているのです。これが、これまでにないものなのです。これまでは、差別する側も、表面的には差別はいけないと言っているのに、いざ結婚となると親が反対したとか、そういった差別でした。ところがこの数年は、もっとも差別的なことばを大声で叫ぶ。そう言われると、これまでの理論武装では反論できないそうです。今、部落の名簿を一人の青年が公開しています。もちろん解放同盟は訴えているそうです。ところがその青年は弁

護士も付けずに、堂々と、あなたたちは部落民であることをむしろ誇りとしよと言っていたのではないですか、誇りとするなら、公開したって良いではないですか、どうして名簿を公開してはいけないんだ、やっぱり恥じているのではないか、と言うのだそうです。あまりにめちゃくちゃなので、逆にことばに詰まって反論できない。確信犯というか、開き直りです。

沖縄についてですが、どうして74%の基地負担をしなければならないのか、沖縄は日本の一部なのに、なぜ沖縄だけに基地が集中するのか。それは日本に構造的差別があるからです。今年1月2日、東京メトロポリタンテレビジョンというローカル局で、基地反対派は金のためにやっているとか、雇われているとか、テロリストだとか、中国人や韓国人がやっているといったデマが堂々と流れました。これまでだったら、それはデマだと言われたら、それを世に出した放送局はまずいことをしたと思ったわけです。でも、今回の関係者は、制作者も、テレビ局も、どこが悪いのですか、そういう声はありますよと、みんな口裏を合わせたように開き直っています。この番組の司会者は長谷川幸洋さんという東京新聞の論説副主幹でした。東京新聞にはたくさんの抗議の声が寄せられ、東京新聞は1面を使って全面的に謝罪をしたのです。そして、今回の事を重く受け止め、対処しますと言いました。多くの人は、さすが東京新聞だと思った。ところが、2月25日の沖縄タイムスによると、3月以降も長谷川さんは論説委員として残ると、3月1日付で発令されることが明らかになりました。これでは処分ではなくて、ただの移動です。長谷川さんは、私からやめることは500%ないと、ラジオでも開き直って言っていました。

今の時代、開き直る人の方が強いのです。なにか、嘘でも開き直ったほうが勝ちという、そういう世の中になってしまっているのです。

4 絶対的な正義と宗教の役割

正義ってどこにあるのか。これまで、正義フォビアが世界を覆っていたと言われていました。



Sr. 山本きくよの歌とともに会議は進みました。

つまり、正義なんていう価値観は相対的なものであって、時代によって変わるものだから、価値観なんて時代時代で変わるのだから、大きな声で正義なんて言うのははずかしいことだという風潮が、この30年くらいずっとあったのです。だけれど、今、正義どころか、まったくの誤り、事実や真実でさえないものが、逆にそっちが真実みたいな顔をする時代になってしまっているのです。時代によって揺るがない正義、真実って、やはりあると思います。あるということを使い続けなければならない。平和は大事であるとか、人の身になって考えようとか、差別はいけないとか。なんで人を差別してはいけないの、理由なんてないです。そこは普遍的に譲れないわけです。

みなさんはここでとても強い。それは聖書に書いてあるからとか、神様がそう言っているからと言える立場にあるからです。これは譲れないと言えるのは、強いと思います。

沖縄の座り込みに来ていたシスターたちは、だって、平和を大事にするわけですから、とはっきり言います。それに励まされるのです。時代は変わってもゆるがない真理とか、正義、平和、愛というものがあるということを見直さなかったら、人間の世界は、これでは終わってしまいます。今こそみなさんは、世の中に必要とされているのだと思います。

(要約：日本カトリック正義と平和協議会事務局)

分科会報告・改憲

「社会の中で福音を生きる」ために

■ 清水京子（聖パウロ女子修道会）

修道会の「正平協」の窓口として、3年ぶりに全国会議に参加しました。会議が始まる金曜日の夜は、例年ですと一般公開の講演会があるのですが、今回の会議はちょっと違っていました。

約70名の参加者は、グループ作業のために、あらかじめ改憲、原発、沖縄の3つの中からひとつを選んでいました。会場のホールは、すでに改憲A、B、C、原発A、B、C、沖縄A、Bの8つにテーブルができていて、最初からグループに分かれて席に着きました。

会議は、担当司教である勝谷司教のお話から始まりました。「若い女性と水夫」という短いお話を読み、そこに登場する5人の人物を、好意度でランク付けし、それを分かちあい、グループとしてまとめるという作業をしました。このグループ作業をとおして、これから一緒に過ごすグループメンバーを知ることができました。また、意見の違いをどのようにまとめていくかを体験しました。8つのグループのほとんどがひとつの意見にまとめて発表することができたのですが、ひとつのグループはまとめることができませんでした。これも現実です。

著名の人を招いて講演会をするという集いを企画しても、同じ意見の人々が集まる場での講演は、同じ種類の人の中で盛り上がるだけで、違う意見の人々との距離が縮まったり、考えていない人に影響を与えたりすることにはならないので、虚しさを感じることもあるのですが、勝谷司教が示してくださった今回の方法は、とてもいいなと思いました。初めて出会った人々が、互いを知り合うためのワークショップとして、他の集いでも利用できそうです。司教から、思わぬ収穫をいただきました。

わたしのグループ「改憲C」は、司祭4名、男性信徒1人、シスター3人という8人のグ

ループでした。最初のグループでの分かち合いと一つにまとめていく作業をしながら、メンバー各々のタイプがなんとなくつかめ、2日目の作業のための司会者と書記を、スムーズに選ぶことができました。

2日目午前中の講演者は、精神科医で立教大学でも教えていらっしゃる香山リカさんでした。テレビで見る印象とは少し違い、ざっくばらんな方で親しみを感じました。午後は、香山さんのお話を受けて、感想や、それぞれが選んだ改憲、原発、沖縄という切り口から、教会や修道会の中でこのテーマを話すときの難しさや理解してもらうために行っていることについての分かち合いをしました。ここでわたしは、他の修道会が行っていることを聞いて、やってみたいなということをしていただきました。収穫でした。

再び勝谷司教のお話が入り、その後、グループ作業として、これから何を行っていったらよいかについての作業をしました。考えられることを付箋に書き、それを内容別に島分けしていき、模造紙にまとめていきました。翌3日目に、グループごとに発表しました。

今回は、改憲、原発、沖縄という3つに分かれての作業でしたが、自分たちが信じて行っていることを、教会や修道会、また地域の中で、今後どのように展開していったらよいか、どうやって多くの人に知らせていくか、立ち止まって考えるという機会を与えていただいたように思います。

グループ作業や分かち合いは苦手なのですが、今回のグループ作業はとても楽しく、一人ひとりが活躍していました。多くのものを得ることができ、これからの働きにエネルギーをいただきました。

分科会報告 原発

■ 山下和実 (鹿児島教区)

今回、二回目の参加であった。顔見知りの方が増えてきて、雰囲気少し慣れてきた。昨年は、「お客さま」として聞いているだけであったが、今年は「参加者」に近づいてきたような気がする。

二日目に行われた香山リカさんの講演から、いくつかのヒントをもらった。フロイトの精神分析学を基に「改憲」「沖縄」「原発」を読み解く手法は、専門家らしいと思ひ感心した。「自己愛」の拡大が、他者の不在や否定になり、社会のゆがみになっていると思う。「正義フォビア」という言葉を初めて聞いた。価値観は時代によって変わるものであり、価値観の相対化という意味に理解した。確かに、今日そういう傾向があり、特に若い世代に浸透していると思う。これに対して、香山さんは「普遍的価値」の重要性を指摘された。ここに正義と平和を実現し、福音を生きようとするキリスト者の使命があると感じた。

今回、「原発A」の分科会に参加した。司教1名、修道士1名、修道会代表（シスター）4名、教区代表信徒2名のグループであった。初日に行なった「コンセンサスゲーム」は、物語としての不自然さを感じたり、「フェミニズム神学」の意見を想像しながらゲームを楽しんだ。学校の授業や教会内での導入に活用できそうだ。

二日目は、原発についての各人の考えと具体的にやっていることを分かち合った。小教区・修道会内において、原発問題に取り組むメンバーは少数で、無関心層が多い傾向がある。主任司祭との関係で話題にすることすら難しい。昨年出された原発廃止の司教団メッセージは重要な文書であるが、信徒に普及していないようだ。司教方は、メッセージが教区民に届いていると思っていたらしい。また福島県産の野菜果物の販売について、安全性の面で意見が分かれていることも紹介された。原発作業員の被ばく、将来起こりうることとして結婚差別（福島県出身であることを理由として）も懸念される。原発の危険性が明白であるにもかかわらず、再稼働されている現実にはたいしての不安感と廃炉に向かわないことへの無力感が感じられる。

鹿児島教区においても、他の教区と同様に、原発廃止の司教団メッセージが伝わっていないように思う。また昨年出版された『今こそ原発の廃止を—日本のカトリック教会の問いかけ』の理解も不十分である。カトリック教会がなぜ原発に反対しているのか、信仰の問題として原発を考えるためにも、学ぶ機会が必要である。また脱原発とともに、電気エネルギー依存を減らすことも大事である。生活スタイルの見直し、生き方の転換も問われてくる。個人として、教会として、具体的に取り組むべきだろう。

今回、分科会に参加できなかったが、「沖縄」の問題も喫緊である。基地に苦しんでいる沖縄の人々の痛みを理解し、寄り添うことが必要である。鹿児島は沖縄の隣の県であり、かつて薩摩藩が琉球を侵略した歴史を思うと、無関心であることは赦されない。鹿児島教区として沖縄教区と連帯する行動を具体化したい。

今回の会議の最大の収穫は人のつながりができ、同じ信仰をもつもの同士で、語り合うことができたことである。



分科会 原発Aグループの報告

分科会報告 沖縄

■尾碕一美 (さいたま教区・援助修道会)

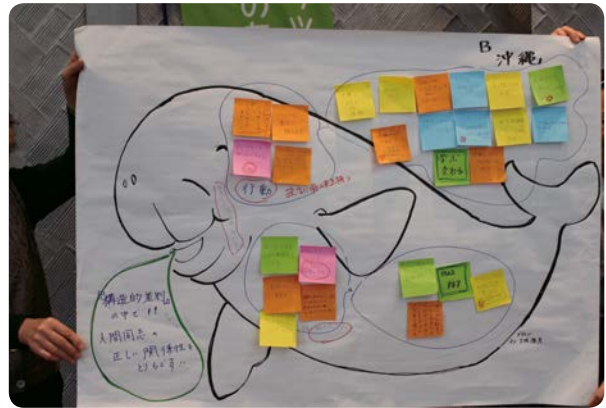
私たちのグループは、那覇・福岡・横浜・高松・名古屋・さいたまの6教区と男女2修道会からのメンバーでした。最初に一人ひとりが自己紹介も兼ねて、それぞれの活動や今の立場から感じていること、見えていること、聞いていることを分かち合うことから始めました。

香山リカさんのお話は、『マインドフルネス最前線』（サンガ新書、2015.11.01）の中で、初期仏教の長老や日本の臨床医学者との対話を載せているのを読んでいたのが興味がありました。「マインドフルネス」が、上座部仏教から生まれた瞑想で、その目的がずれて経済至上主義に転用されてしまっているとの指摘でした。

現代の社会背景を分析した精神科医である香山さんの話の印象に残った言葉で、グループのメンバーたちが活動の中で共通している要素は、「防衛機制の中で働く同一視」や「投影」、「自己愛」「開き直り」「身もふたもない」「ごまかし」などの言葉があげられました。

那覇教区の方の話して下さった沖縄で起きている問題が生々しく、リアリティに満ちて伝わってきました。高江のヘリパット工事の強行、辺野古の埋立て、オスプレイの墜落、基地・米兵にまつわる事件、報道のコントロール、土人発言などなど、聴いている一人ずつの心が痛み震えました。

また一人の方の分かち合いで、日常生活の中でリアルなものよりリアルでないものに魅かれている自分への気づき。教会の子どもたちにパンと愛のどちらを選ぶかと聞いたらパンを選ぶと答えが返ってきた衝撃。経済を選んでしまう未来を担う世代を案ずる声も出ました。社会問題に関わろうとする私たちが『敵を愛しなさい』『天の父は善人にも悪人にも雨を降らせる』（ルカ6：27-28、マタイ5：43-46）とのみ言葉を生きる困難さ。面倒くさいことを抱かえていかないといけない現実、そしてこの葛



分科会 沖縄Bグループの報告

藤と不安を減らして安定を求めてしまう自我を見ます。でも、神は『神の国はあなた方のただ中にある』（ルカ17・11）と問われているのです。

私たちのグループは、環境汚染の中で「いのちを大切にしたい」との祈りのシンボルとしてジュゴンを描きました。沖縄がおかれている構造的差別の中で「ハイサイ グスーヨー」と隣の人と声を掛け合うことの大切さも書きました。宗教者として出会った私たちが沖縄と距離を超えて連帯していく歩みは、琉球文化の豊かな歌や食生活、フィールドワークなど、そこにはバーチャルではない交流しあう生きた人間の関係性の中での祈りがあるのだと話しました。関わりを育んでいくためには、面倒くさい、厄介だなあ、難しいなあと感じている「私」から、その感じている「私」を認め、気づき、自由な心でイエスと共に愛を育ませてくださいと、神への恐れへの通路を開いていく祈りが大切だと感じました。人の話を聴いて震える体験、痛みをもって気づくこと、起きている現実をあえて自分自身の個人的な痛みとすること、そして私が今の立場でなしうることを見つけ出すことをしていきたいと思っています。ここに、「マインドフルネス」の慈悲の瞑想が活かされるのではないのでしょうか。

「沖縄戦で戦死した少年飛行兵の日記から、戦争を告発し護憲を訴える」

■ 秋山成子（事務局）

2017年3月4日、上記の講演会に参加した。講演会は少年飛行兵の日記をまとめた平野治和さんと、少年兵養成の研究をしている檜崎由美さん（多摩地域の戦時下資料研究会会員）のお話だった。

平野治和さんの叔父の平野利男さんは1926年（大正15年）に福井県で生まれ、1945年4月28日に沖縄航空戦で戦死、享年18歳と5ヶ月だった。治和さんは2015年、実家の土蔵から大学ノート3冊の「修養日誌」を発見した。利男さんは15歳で東京陸軍航空学校（武蔵村山市にあった少年飛行兵養成学校）に入学、通信担当としての訓練を受け、16歳で水戸陸軍航空通信学校に入った。日誌は水戸通信学校時代の1943年4月5日から1944年6月10日に書かれたものである。

貴重な記録を治和さんは『花もひらかぬ十八のまま 沖縄戦で散った少年飛行兵の日記』平野治和編著 合同フォレスト 2016年7月20日発行）にまとめて発行した。あまりに若い息子の死を母、善子さんは「散華せし 子はいつ迄の わが胸に 花もひらかぬ 十八のまま」と詠み、それが著書のタイトルである。

日誌は少年兵の教育において義務として書かせたもので、また上官が点検することが前提である。なので、率直な気持ちが表れている部分のごくわずかだが、毎日の学業、日常の出来事が記してある。旧日本軍の少年兵の総数は陸、海軍合わせて40万人と言われており、その数の日誌が書かれたのだろう。

書籍は利男さんの生い立ちや少年兵養成、当時の時代背景、無線通信の解説もまとめてあり、日誌を読む助けになっている。日誌をまとめる中で治和さんは利男さんと出会い、考察をすすめていった。書籍のおわりにこのようにまとめ

ている。

「人権と民主主義という、戦後の価値観の中で生きてきた戦後世代の私たちには、簡単に理解できない71年前の日本があった。

71年前の、事実と真実を知らない

私たちが、安易な感情や薄い知識だけで、あの戦争を理解することはできない。

私たちは71年前の無数の命の散華をどのように受け止めたらよいのだろうか。

そこには、日本軍国主義と日本人による加害と被害の痛切な歴史的事実がある。

私たちも、わたしたちの子どもも孫たちも、その事実に向き合う使命をもたされている。

幾千万の血の凝塊、その中から産み落とされたのが憲法九条ではないのか。

そのことが、利男の日誌を読んで、分かった気がする。

沖縄で散った利男の命と、死ぬまで子を思い続けた母、善子の命もまた、日本国憲法九条につながっていることを私は確信する。」

平野利男さんの日誌は戦争の時代に生まれ、戦争の時代しか知らず、花ひらくことを許されず若くして死ぬことを余儀なくされた若者の魂に触れる、そして命を考える貴重な記録だ。改憲への動きが進む中、憲法九条をしっかり手に握り、戦争にNoと言いつけたい。今回の講演会は時代の曲がり角にいる私たちに多くの示唆を与えたと思う。



「おまえの同胞に見て見ぬふりをしないこと」

■ 浜 矩子 (同志社大学教授 経済学)

マタイ福音書に次の箇所がある。「あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい」(マタイ5・40-41)。

2月19日、日曜日のミサの聖書朗読の中にこのくだりが出て来た。この少し前に、我々がよく知っている「右の頬を打たれたら左の頬も…」の言葉がある。

下着も上着も取られてしまえば、丸裸だ。これはなかなか辛い。それでもいいじゃないか。イエズス様はそう言われる。一ミリオンは、約1500メートルだそうだ。それなりの長さだ。この距離を一緒に行ってくれと言われたら、その倍付き合っただけなさい。イエズス様はそうおっしゃっている。

惜しげなく与える。この感じがとてもいい。ケチ臭さが一切ない。一つ下さいと言われれば、一つなんぞと言わないで、どうぞ、二つでも三つでも持って行って下さい。この心意気が世の中を大らかにする。世の中を平和にする。

この新約的精神に高揚感を得ていたなら、旧約聖書の中に次のくだりがあることを知った。「飢える者におまえのパンを分かち与え、家のない貧しい人々に宿を与え、裸を見れば、着物を着せ、お前の同胞に見て見ぬ振りをしないこと。その時、おまえの光は暁のように輝き出で、お前の癒しは速やかに生じる」(イザヤ58・7-8)*。

裸を見れば着物を着せる。人の裸を決して見て見ぬ振りはしない。他者の不幸に対して、決して無関心を決め込まない。そして、惜しげなく手を差し伸べる。この果敢なるおおらかさが、旧約から新約の世界へと流れ込み、引き継がれているわけだ。この力強い優しさを発揮できたその時、「おまえの光は暁のように輝き出で」と言っていただけ。

暁のように輝き出る光とは、何と素晴らしいイ

メージであることか。今の時代は、光と闇の闘いの時代だ。この頃、そのように思えてならない。闇の側には、富国強兵路線をひた走る妖怪アホノミクスがいる。何やら、トラの皮のパンツを履いた鬼さんみたいなトランプおやじもいる。彼らは少し滑稽だ。とても幼児的である。だが、彼らの幼児的凶暴性をあなどってはいけない。彼らは、下着を与えれば上着もよこせというだろう。一ミリオン付き合ってくれと言われたら、一ミクロンたりとも動いてやるものかと息巻くだろう。だが、暁のように輝き出でる光の側にいるはずの我々は、そんな彼らに対してさえ、惜しげなく手を差し伸べるパワフルな優しきおおらかさを備えていなければいけないだろう。そのような光に対して、闇は勝ち目がないだろう。

ところで、旧約聖書から新約聖書へと受け継がれた精神を、しっかり受け止めているもう一つの文書がある。それは日本国憲法だ。

日本国憲法の前文に、次のくだりがある。「いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」。この精神は、まさしくイザヤ書の「おまえを同胞に見て見ぬふりをしないこと」の精神そのものだ。自国さえ強くなればいい。自国さえ世界の真ん中で輝けばいい。それがチーム・アホノミクスのスタンスだ。トランプさんは「アメリカ・ファースト」を絶叫する。いずれも、全く同胞の状況など眼中にない。ご存知の通り、創世記の中には、闇には、ただなかで輝いている光がみえないという文言がある。「自国のことのみに専念して他国を無視」する人々は、ここに最大の弱点があるのだと思う。

闇将軍たちの視野狭窄。そして光に向かって閉じられた目。それらは、暁のように輝き出でる惜しげなき光の前で、結局のところ無力なのだと思う。

*2011年フランシスコ会聖書研究所訳

目次

- 1 特集 カトリック正義と平和協議会全国会議
- 2 講演会報告『改憲・沖縄・原発』 香山リカ
- 7 分科会報告・改憲 清水京子
- 8 分科会報告・原発 山下和実
- 9 分科会報告・沖縄 尾碇一美
- 10 報告「宗教者九条の和」主催 第9回憲法講演会
「沖縄戦で戦死した少年飛行兵の日記から、
戦争を告発し護憲を訴える」 秋山成子
- 11 連載第4回 小さな泉が川となる 浜矩子
- 12 まんが「ポストランテの石橋さん」

表紙写真 共謀罪に反対します! 3月20日、いのちを守れ! フクシマを忘れない
さようなら原発全国集会(代々木公園・東京)にて



各地
からの
報告

正義と平和 えとせとら...

福岡教区

2017「福音と平和の集い」報告

福岡教区では今年も2月11日「福音と平和の集い―見て聞いて知って働く」が開催された(福岡教区使徒協主催)。当日は雪もちらつく悪天候にもかかわらず宗教を超え200名を超す参加者であった。午前の部では大阪釜ヶ崎よりSr.マリア・コラレス(聖母被昇天修道会)を迎え、基調講演「社会の中に福音を生きる」が行われた。野宿者・日雇い労働者・外国人の人権擁護、さらには護憲・平和運動などに従事しておられるSr.マリアさんは其々の現場における体験と出会を振り返りながら、困った境遇におかれた人を大事にするという神の思いはすでに社会の中に生きており、政治的な問題から苦しむ人のため豊かな生命と平和を目指し運動をしている人々にはイデオロギーに関係なく福音が生きている、たとえその人々は神を信じてなくても最後の審判では「父の祝福された者」とよばれる、そして福音はキリスト者の所有物ではなく「世界遺産」であり彼らと一緒に働くことは福音を生きることですと話された。

午後からは憲法、玄海原発、障がい者、死刑廃止、移住労働者、子供の貧困、Sr.マリアを囲んで、の7分科会が行われた。中でも再稼働を控える玄海原発に関する分科会は地元佐賀地区の方々が積極的に取り組まれた。

(社会福音ネットワーク・福岡 堀江直文)

編集後記

いま、政府は、福島原発事故の収束を急ぎ、仮設住宅の閉鎖、自主避難者への住宅支援の打ち切りなど、強制的ともいえる方法で帰還政策を進めている。マスメディアでも、オリンピック競技の誘致など魅力的な情報を流して、日本人なら帰還賛成があたりまえ、という空気を作り出している。放射線は見えず臭わず、被害が現れるのにも時間がかかり、数値で存在を確認するほかはない。数値についての専門家の意見もいろいろあって、それをどう受け止めればいいのか、自分の判断に自信を持つのもたいへんだ。そして人は、自信がない時、異なる判断に対して、寛容さを失いがちだ。政府の圧倒的な力を前に、私たちはあまりにも小さい。(h)



発行日 2017年4月1日(隔月発行)
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,500円(送料共)
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>